ジオパークとジオツーリズムに関する実践的研究

ー日中の事例を比較してー

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科

楊　燕

21 世紀に入り、地球環境問題が深刻化している。このため、自然災害が頻発し、防災や地理・地学などの環境教育に関わる、自然についての知的関心を高める手段として「ジオパーク」の存在に注目が集まっている。日本は、長引く不況によって、地方経済をはじめ、様々な問題が顕在化していることから、地域資源を活用した地域再生が喫緊の課題になっている。こうした中で、各地で積極的に検討され始めているのが「ジオパーク」の取り組みである。ジオパークは地域の「大地の遺産」の保護とジオツーリズムなどを活用することによって地域の持続的な活性化を目指す仕組みである。ただ、行政や地域住民がジオパーク及びジオツーリズムの本質を正しく理解しないまま、行政主導で認定を目指す傾向が見られる。

また、日本ではジオパークの認知度が欧州等と比較してもそれほど高いとは言えず、ジオパークを活かした地域振興も、模索している段階にある。一方、早くからジオパークに関心を寄せてきた中国では、世界ジオパークも世界で最も多い数が認定され、地質遺産を積極的に活用することにより、地域振興に対して、大きな成果を上げている。そこで、ジオパークの先進国に学ぶ必要があると指摘されている。

以上の問題意識に立って、本研究はまず、ジオパークの本質、そしてジオツーリズムとは何であるかをあらためて原点に立ち返り、ジオパークとジオツーリズムの定義や役割などを明確化した上で、ジオパーク制度やジオツーリズムの本質を明らかにしていく。次に、質の高い日本型のジオパーク像を確立することを視野に、日本における世界ジオパーク第１号の島原半島世界ジオパークと、中国の伏牛山世界ジオパークを事例にして、両国のジオパークやジオパークにおけるジオツーリズムのあり方を示し、比較検討も加え、新たなジオツーリズムの理論構築を目指すことを目的にしている。

その結果、まず、世界ジオパークネットワーク（GGN）の成立背景や、ジオパークの定義に明文化された６つの内容や３つの目的（①次世代のために地質遺産を人類の貴重な「大地の公園」として守る、②博物館など施設を整備し、地質景観や環境問題について広く一般市民を教育し、同時に地質科学に研究の場を提供する、③ジオツーリズムなどを通じて持続可能な経済的開発、地域社会の発展を保障すること）の意義について再確認をおこなった。さらにGGNのジオパークの特徴などを踏まえ、大地の遺産を保護・保全していくために活用と両立することによって、地域の持続的な発展を目指していくことがジオパークの本質であるとの結論を導出した。

ジオパークの地域振興の核と位置づけられるジオツーリズムについては、国内外の定義に対する議論の流れをまとめ、ジオツーリズムの３つの本質①普及教育を促す観光②持続可能な観光③楽しく体験できる観光―を析出した。その本質を基づいて、ジオパークにおけるジオツーリズムについては、「観光客がストーリー化した地形・地質を基盤にして形成された自然環境と、自然環境の基盤を背景にして形成された歴史・文化的な人間環境のつながりに触れ、楽しく体験を通じて、その相互関係を理解すること。さらに、大地の遺産の保護や地域経済に貢献することによって地域の持続的な発展を維持することができるツーリズム」と定義をおこなった。

次に、日中両国の世界ジオパークの管理局や事務局での聞き取り調査を通じて、それぞれのジオパークの特徴と課題をまとめ、また、両ジオパークでの観光客を対象としたアンケート調査によって日中の観光客意識からみた日中のジオパークにおけるジオツーリズムの特徴を明らかにした。さらに、観光客は、ジオツーリズムを通じて地域の魅力に触れ、ジオパ

ークに関心を持つようになるという過程を明らかにした。ジオパークは持続可能な地域づくりにつながるジオツーリズムの展開に将来性を見出すこともできた。日本のジオパークにおいて多くの課題が挙げられるが、ジオパークやジオツーリズムの役割を踏まえてコンテンツの充実を図ることで、現状の改善が期待できる。中国のジオパークは、観光客からジオパークやジオツーリズムに対して高い評価を得ている一方、持続的な地域振興につなげていくことができるか地域住民の参加という点が課題として残る。日本と中国のジオパークは、国民がジオパークの仕組みに対する理解をさらに深め意識を高めるには、まだ多くの努力が必要である。また、中国はジオパークを国の直轄事業とし、欧州のジオパークはボトムアップ的に事業を進めていることに対して、日本の場合は、ジオパークが「住民のもの」と強調しながら、現段階では、地方行政が国にお伺いを立てつつ、地域住民を引っ張り上げるような運営方法（ミドルアップ）で展開されていることから、実際に日本はジオパークにおいて独自の運営方法を持ち、今後は日本型のジオパークを定着していくだろう。

最後に、日本と中国のジオパークやジオツーリズムの在り方について新しい理論の構築を試みた。中国のジオパークが順調に発展するためには、管理権と経営権を分離することを提案し、住民や観光客と社会団体の役割も問われるとした。日本のジオパークは住民主体、そしてジオパークと住民が一体となって活動を進めることを理想としている。地域住民の地域資源の再発見をうながし形成していく蓄積が求められる。「大地の遺産」を軸として自然環境と人間環境の相互関係を示すジオストーリーが大きな役割を果たすといえる。そのありかたについての運営方式の提案は今後ジオパーク活動の方法性の指針になると考えられる。